



園池製作所の職工と幹部者

労働者威嚇の一武器

労働問題に對して無理解なる政府當局及び資本家階級の壓迫に依り、準備を調へながらも雌伏せざるを得なかつた日本の労働運動は、大正八年に至つて機運漸く熟し、澎湃たる世界改造の大潮流を背景として、眠れる獅子の覺めたるが如く猛然として奮起し、歐米諸國が半世期に亘つての收穫を、僅々一ヶ年間で獲得したるかの觀があつた。

労働問題に關し何等の理解無く、何等の研究無く、何等の準備すら持たない日本の資本家階級は、之れに對し周章狼狽爲す所を知らざるが如き有様であつたが、漸くにして歐米諸國の足跡を追ひ、工場閉鎖といふ武器を以て労働運動を威嚇した。併しながら彼等は現在の日本の産業状態に比べて、労働者の要求が過當だから已むなく工場閉鎖を行つたと言ふのではない、労働者の要求の如何に係らず、寧ろ其要求の正常なるを認めながら

も、之を威嚇せんが爲めは無理解無行の工場閉鎖である。日本の労働者は果して此理不盡なる資本家の態度に屈伏する事が出来るだらうか。大正九年の新春、東京市下は城南の一角、大崎町株式会社園池製作所に於ける工場閉鎖の結果は、此問題に對して、適切なる答辯を與へたるものである。

生活脅威の壓迫に覺めて

園池製作所の労働戦は、此問題に適切なる解決を與へたのみならず、他に又重要な事を物語つてゐる。乃ち、職工側が會社に對して要求したのは、單なる時間短縮賃銀増加の要求許りでなく、實に産業民主の精神が含まれてあるが故である。

恰も此時、日本の進歩的なる國民は舉つて政治上に於ける、普通選挙の要求を絶叫し始めた、労働者が一度眼を轉じて自己の労働しつゝある工場の組織を見んか、労働生活の自由は、總て資本家

の手に握られ、従つて自己の生存権は、常に非常なる脅迫を受けつゝあるに心附くに相違ない。普通選挙を絶叫する労働者、豈此資本專制の横暴に屈し居らる可き、先づ這箇の横暴と戦ひ此制度を打破せんと志すのは、労働者自覺の必然の歸結でなければならぬ。

東京鐵工組合に屬する、園池製作所の職工は、此産業民主の第一の烽火をあげたのである。資本家は之れに對して如何なる態度を執り、其結果は如何に成つたか？

園池製作所の實力

労働争議の経過を叙する前に、讀者の理解の爲め園池製作所其者に就て語つて置く必要がある。

園池製作所は工具製造、器械製作を根本の事業とする會社であつて、資本金は五十萬圓、現在に於て其實力は二百五十萬圓を出でんとしつゝある。而して現在の職工數は總計二百七十三名で、利益